
清涼高校裁判部

熊取

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清涼高校裁判部

【Nコード】

N2447D

【作者名】

熊取

【あらすじ】

とある学校で起こる問題を解決するためと退屈しないために奔走する昔の事が原因で少し変わった少年による学園生活

始まり（前書き）

1カ月に一回ぐらいで更新します。

少し本文をつけたしました。

始まり

昔、一人の男の子がいた。

その子は素直で騙されやすかった。

そして、ある日彼はこの世を知った。

その日彼は決意した。

いつか・・・いつか・・・この世を・・・○○○・・・と。

ここが明日から俺が通うことになる清涼高校かなかなかだな。

外観は立派だし何より生徒がにぎやかだ。

問題になりそうなことも多々あるだろ。

まあ、無くてもそれはそれでいいが俺を退屈にさせないでくれよ。

じゃあ、さっそく準備に入りますか。

これはある私立高に突然編入してきた一人の少し変わった天才少年
によってもたらされる

少し変わった生徒たちによって

学校を中心として起こるかなり変わった学校生活を描いた物語

転校初日（前書き）

読者数と皆さんの感想などを見て次の回を投稿します。

かなり本文を訂正しました。

転校初日

——4月中旬午前6時——

ジリリリリリリリイイン
ガチャツ、

もう朝か今日は記念すべき登校初日だからな遅刻したらシャレにならないし、

起きて準備でもするか、

つつても大体は昨日の内に終わらしているからすぐ終わるだろう。

まあ、やるか。

——午前8時——

前の方に学校に来ていたので誰かに道を尋ねるなんてイベントも起きずにすんなり

学校まで来られた。

それにしても人いねえなあ。

少し早く来すぎたので今日の大事なイベントの原稿でもチェックしとくか。

そう思い、中庭まで行ってベンチに座って確認を始めた。

それにしても、少し煩くなってきたな、時計を見るともう15分程

経っていた。
もういい時間になったんでそろそろいくか。

――職員室――

なんかここは意味なく緊張するよな、
フウツ、入るか「失礼します。」さあ、先生は何処かな、と思って
周りを見回していると、

「君が転校生かな？」誰かが話しかけて来た。
見た目で言ったら先生としては70点で所だな。俺からこれだけの
評価を貰えるんなら大したもんだ。

「はい。僕です、では先生が担任の丸谷先生ですか？」

「察しいいいね、そうだよちなみに君は1－Aだよ
何も質問とかがなければちょうどいい頃合いだし教室に行こうか」

「はい、特にはないので構いませんよ」

――1－Aの教室前――

「僕が呼んだら入ってきてね」
ガラっ、ガララララッ

（ふうっ、大人と一緒に歩くもんじゃないな。暇で暇で仕方ない
それに肩が凝る。あの人は必要以上に物を喋らんな。）

「今日は、H Rの前に大事な話がある。それは――、・・・・・・あゝっ、

まどろっこしいのは好きじゃないんでもう入ってきてくれる。」

（はあゝっ、適当すぎるだろそれまどろっこしいのレベルじゃねえぞ。それにめんどくさいだけだろそれは――。でも、まあここでごねてても仕方ないしなしょうがねえ、入るか。）

ガラっ、ガララララッ

タッ、タッ、タッ、タッ、・・・・・・しゝゝゝゝゝん

めっちゃ注目浴びてるし、しかも、この空気絶対このおっさんの所為やろ。人を評価するのは得意なんだがな。こいつは必要以上じゃねえな、必要最低限の事もしゃべらんタイプだな。それより、どうするか・・・・・・簡単に済みますか。

「えゝゝつと、この子は突然転校することになった、あゝゝつ「朝日 明です。

よろしくお願いします。」で、質問とかは後にして先にH Rをします。

で、君の席は窓際の一番後ろだから」

（紹介も無しか、まあどうせやる気も無かったから構わんが。席が一番いい所なのが唯一の救いか）

「・・・・・・後は、今日は授業が終わってから”部活紹介”があるので少し下校が遅れます。」

もう特に無いのでこれでHRを終わります。」

（フツ、部活紹介ねえ。まあ、俺はこの日に合わせてここに来たんだからなあ。

空回りしない程度に気合い入れておくか。ここの学校は俺の以外にもユニークな部はあるからな。）

「よろしくな、転校生!!」

と、俺が考え事をしているのを遮って前の席のやつが話しかけてきた。

内心少し腹が立ったがそれは置いといた。

「よろしく、俺の事はどう呼んでくれても構わない、それでおまえの名前は？」

「岡崎 斉だ、んでちょっと周りを見てみ。」こう言われたので見てみる。

（ふむ、何かかなり見られてるな。まあ、差し詰めいきなり来た転校生の人間観察ってところか。見られるのは嫌いじゃないから構わないが）

「僕は上村 廉よろしく。」

と、隣の子が話しかけてきた。

（まあなんとも、かわいらしい子が話しかけてきたなあ）

「ああ、よろしく。」

「ところで、何でこんな微妙な時に転校なんかしたんだ。」

（クククッ、最初の質問がこんなのは俺も想像してなかった。）

「突然だな、まあいいけど、転校と言うよりかは入学だな。俺、3

「日前まで外国にいたから。」

「マジで？」

「ああ。」

（一週間前には日本にいたけどな）

「外国語しゃべれる？」

「いちような。」

（ペラペラだし何か国語もだけど）

「なんか、すげえな。」

「お前も2，3年いたらペラペラしゃべれるようになるぞ。」

（嘘だけどな。俺も頑張ったし。）

「マジでか？」

「無理だと思うよ。岡崎君なんでここに入れるのか分からないくらい馬鹿だから。」

（馬鹿じゃなくても無理だけどな）

「上村、お前さらっと酷いこと言うなあ。」

「事实は受け止めた方がいいぜ。」

「お前も結構ひどいなあ。」

「お前のキャラのせいだろ。気にすんな。」

「気にすr<キーン コーン カーン コー――ン>」

「なんか言ったか。」

「もういい。」

（ふう、なんとか質問の内容はごまかせたな。

まあ、嘘ついてもいいんだけどなるべく嘘はつきたくないしな。）

＊昼まで省きます。

――昼休み――

「今日は明君もいれて3人で食べようよ。」

4時間目のチャイムが鳴ると直ぐに上村が話しかけて来た。

「おお、それでいいか？」

「ああ。まだお前等以外の人知らねえしな。」

（皆俺のことは意識してるらしいが結局誰も話しかけてこなかったからなあ。

「じゃあ、どこで食う？」

「ここでいいだろ。」

「明君今日からちゃんと弁当持って来てるんだね。」

「ああ、昨日来た時に確認したからな。」

（マンガのキャラだけだろ。何も考えずに初日は学食なんて。

「ふくん、それよりだいぶおいしそうだね。」

「そうか？食べてみる」

（まあ、かなり鍛えさせられたからな）

「いいの？」

「ああ。どうぞ。」

「いただきます。」

で、俺のおかずを一つ取った。

見た目と違ってあまり遠慮するタイプじゃないんだな。

「うん。かなりおいしいよ。どうやってるのかなあ？」

「お前も2，3年やったらこれぐらい余裕だぜ。」

（めっちゃめっちゃ必死でな）

「・・・もしかして、自分でつくってるの。」

（やっぱり驚くわなあ）

「ああ、でも毎日やってるからもう慣れたぜ。」

「ふくん、すごいね。どっかの馬鹿と違って。」

「おお。どっかの馬鹿とちがってな。ハッ、ハッ、ハッ、ハッ。
さっきまでずっと無視されていたので落ち込んでいて、」

話しかけてくれたのが嬉しくて少しテンションがおかしくなっている。

正直少し痛い。

「ねえ、突然だけど明君は何処の部活に入るか決めてるの？」

「ああ。決めてるよ。」

（もう変更も不可能だしな）

「どこに入るの？」

「部活紹介の時まで待てばわかると思うぜ。で、お前らは何処に入るんだ。」

「まだ僕は決めてないよ。今日、聞いてみてそれで決めようと思ってるから。」

「で、お前は。」

「また俺は置いてかれるかと思ったぜ良かった。俺もまだ何も決まってるないぞ。」

（最初の方でちょっと危ないことを言った気がしたが。）

「じゃあ、まだみんな何も決めてないんだな。」

「大体の人はそうだと思うよ。」

（そうか、今日に掛けてる部もあるだろうな。）

くピーン、ポーン、パーン、ポーン。本日行われる部活紹介でスピーチを行う人はすぐに職員室前に来て下さい。ピーン、ポーン、パ

ーン、ポーン。＞

「悪いな。ちょっと用事ができたわ。じゃあな。」

ふう、いよいよだな。いっちょ気合い入れて行くか。

転校初日（後書き）

次回は部活紹介です。

次でいろんな説明をやろうと思います。

各話のあとがきにこれから一人ずつ人物紹介を書いていきます。

部活紹介

――教室内――

キーン、コーン、カーン、コーン

「結局、あいつ最後まで戻ってこなかったな。」

あれから、すでに20分は経ったがまだ戻ってないので岡崎が気にしました。

「そうだね。先生に聞いてみようか？」

「そうだな、先生!!」

「なんだ。お前らもさっさと廊下出て並べ。」

これから、部活紹介なので皆廊下に出て喋りながら適当に並んでいく。

「朝日君が戻ってないんですが、どこにいるかわかりますか？」

「あゝゝゝあいつな。うん、あいつならたぶんもうすぐわかると思うぞ。」

だから、お前らもさっさと並べ。」

廊下に並んでみて考えてもよく分からなかったのだから、「と思う。」と、聞いてみた。

「うん、僕はだいたい飲み込めたよ。とゆうか、まだ岡崎君わかってないの？」

「やっぱり少し理解力に乏しいみたいだね。」

「はあゝっ、じゃあ何でお前はわかったんだよ。」

「それぐらい自分で考えてみたら。」

「俺が考えてわかるようなことなのか？」

「ごめん。ごめん。そういえば君は学校始まって以来の馬鹿だったよね。」

心配しなくても先生が言った通り少しすればわかると思うよ。」

「そうか。じゃあ、ちょっと楽しみにして待つとくわ。」

この後、上村の予想はだいたい当たるのだが、

それでも、彼の行動は想像の範囲より何回りも広く、驚き、そしてそんな彼に惹かれていくのである。

――部活紹介――

「・・・・・・・・・・これで・・部の紹介を終わりにします。」

くこれで、運動部の紹介は終わりです。引き続き文化部の紹介に入

りたいと思います。＞

フツ、いよいよもうすぐ俺の部の紹介だな。

正直、新入部員なんていらんがこれは、

この部の知名度を上げるのに一番楽な方法と言っても過言ではないからな。

つっても紹介が一番最後だと暇で仕方ないな。

周りの人は全員俺より一個上だから、気楽に声も掛けられんし。

それに何よりかなり真剣なんだよな。俺は別にこんなことやらんならやらんでどうでもいいから今一真剣になれねえから、何か話しかけ憎い。

でも、ホントすごい緊張してる人もいるなあ。

チラッと見ただけで分かるぐらいだから相当だな。

大方、この紹介で失敗したら人数少なくてやばくなるとかその当たりだろ。

＜次は裁縫部です。＞

次が俺の番だな。

それにしても部の名前を聞いた時のみんなの体様がかなり気になるな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これで裁縫部の紹介を終わりにします。」

<次の部は、・・・さ、裁判部です!!>

(ははっ、打ち合わせはやってた筈だけど司会の人を読むのを少し戸惑ったな。

いつまでも待たせちゃ不味いし、反応を見に行くか)

部の名前を呼ばれ、少しすると体育館のステージの端から、威風堂々とした態度でゆっくりとだが、しっかりとした足取りで歩いて来て、真ん中で立ち止まりどこぞの大金持ちみたいな優雅にみんなの方を振り向いた。

「・・・・・・・・。」

突然聞いた事もないような部の名前を言われ、そしてさらに出て来た少年の態度があまりにもしつかりしていたのと、奇麗な顔立ちをしていることも相成って啞然としている。

(皆言葉もでないみたいね。俺もこんな部がいきなり出てきたら確かに驚くわ。

さっきまで小さな声でしゃべっていた人も今は黙ってるしな。それにしても、面白い顔してるな。)

「えーっ、僕がこの部の部長の朝日 明です。

皆さん銘々思うことはあるでしょうが、最初に大まかな事をご説明します。」

「まずは、まあ名前の印象通りこの部で校内で起こった問題を裁きます。

最初に言っておきますが、この部の最大権限は 退学 までに及びます。

だから、この部や僕が生意気だとか言ってあまり反抗的にならない方がいいと思います。

後、裁くと言われてもしっくりこない人は罰を与えようと思って下さい。」

「次に細かい内容ですが皆さんからの些細な悩みでも相談してくれば受け付けます。

それについては2Fのエレベーター付近に箱でも置いとくので入れたいして下さい。

他には、まあこれも大事なんですが問題が起こった時にそれを調べたりもします。

で、その後に一様の処理もしますよ。」

「まあ大体こんなもんです。………だけど、ボランティア団体ではありません。その辺はご了承下さい。

疑問に思ったことなどがお有りでしたらいつでも聞きますので部室を訪ねて下さい。」

「これで、紹介を終わりにします。」

（ふう、少し緊張したな。だけど、これで何が起こるかはわからんが少なくとも、全校に知れ渡ったのは確かだな。とりあえず第一関門は突破って所だな。）

紹介の間、生徒も先生も終始無言で、皆話を聞きいついて終わってからも少しの間静かだった。

「……確かに先生の言った通り少し待てば何所にいるかわかったけど、

予想外すぎるだろ!!」

朝日の部の紹介が終わってからしばらくして冷静になってきたので喋り出した。

「確かにね。だいたいの予想は当たってたけど、部活の名前や内容にはかなり驚いたね。」

「だよなあ。裁判部なんて見た事も聞いた事も無いもんな。にしても、あいつ転校初日ですごい事するよなあ。」

「そうだね、でもかなり彼に興味がわいてきたよ。」

「お前、……まさか。」

「しゃべる事の内容によっては容赦しないよ。」

”ニコッ”

笑顔だけど笑っていないというような感じである。

(ヒイツ、笑顔怖っ。)

「ゴメンナサイ。ウルシテクダサイ。オネガイシマス。」

(はああっ、情けないねこの子は。なんで今まで友達やってたんだろ。)

「もうそろそろ教室に戻らないといけないみたいだから早くいくよ。」

「お、おう。」

部活紹介（後書き）

記念すべき最初の紹介となる人物は岡崎 斉です。

おかざき
ひとし
岡崎 斉

A型 6月14日生

身長 176 cm 体重 67 kg

成績 下の上 容姿 中の中

好きなこと 女の子を見ること

趣味 ナンパ 嫌いなこと いちゃいちゃと目の前でされること

性格 馬鹿、積極的に普通の人以上に女性が好きで朝日がこの学校に来る前の2週間の間にもう既に2、3人の人に告白したが結果はまあドンマイである。

だが、家柄は結構いいところでお金持ちの部類に入る。
本人はこのことを快く思っていないらしいが……………

作「今回最初の人間に選ばれたのですがどうですか？」

岡「いやっほーって気分です。」

？「クフフツ、まだ全然登場人物がいらないからこれからの境遇を察してくれてくれただけでわ？」

岡「え、そうなの。俺これからどうなるの。」

作「頑張ってください。」

今回はこの辺で終わりです、次は上村です。

岡「俺どうなるんだよっつ。」

生徒会長

——1——A教室——

部活紹介で説明をした後、いろんな人が視線を向けて何か言いたそうにしていたが、

それらをすべて無視して、今は教室に戻ってきて少し落ち着いたところである。

「それにしてもお前凄いいことしたなあ。」

この教室の中の異様な何とも言えないような雰囲気も気にしてないような、もしくはききずいていない、そんな感じで聞いてきた。

「ふふっ、まあな。」

そんな感じで聞いてきたので少し可笑しいと思った。

「それにしても、こんなにもみんなの注目を浴びるとは思わなかった。まあ皆の気持ちもわからんでもないけどな。ここまで来ると気が滅入る。」

今のような大した事の無い様な会話でも朝日がしゃべる時は周りが静かになって皆話の内容を聞いている。

「そんなこと言ってもお前が原因だからなあ。」

「この状況もすぐに収まるだろうから今の内に噛み締めておくわ。」
異質なこの状態すら彼にかかったら余興程度に感じてしまう。

――放課後　裁判部室――

この部屋は2日前まで相談室だった事と昨日少しアレンジを加えた事もあり、かなり豪華になっていて、彼はこの部屋の真ん中にある長机の後ろにある
周りの中でもかなり高そうな椅子に堂々とそして大いに楽しそうに座っていた。

今日一番最初に来るのは誰だろう。昨日まで知っていたのは校長と理事くらいだからな。
まず、生徒会でも来るのか。それとも先生かな。それか新入部員でもくるか。
早く誰か来ないかなあ。

(ざわ、ざわ。)

そんなことを考えていると誰かが部屋の前にいる気配がして来たので、

「入って来て下さい。」と、こちらから促すようにした。
ガラガラッ、バタン。

「初めまして、生徒会の会長の篠原　朱音です。この部について尋ねたいことがあるので伺いました。」
入ってきたのは生徒会の会長で背筋はちゃんと伸びていて服装や態

度などあらゆる所が生徒の模範となっており、どこか威厳も漂っていてしっかりとした立派な生徒会長というような姿をしている。

「こちらこそ初めまして。部長の朝日 明です。それにしても、よく出向いてくれましたね。放送で呼ばれたらこちらから尋ねますのに。」

「私が聞きたい事があるので、私が出向くのは当然のことですよ。」
「なかなかいい心掛けだな。」

「まあ、立って話すのもなんですし。どこでも良いので腰を掛けて下さい。」

そう言われてちょうど正面にある長椅子に恭しくという様な感じで座った。

「それで話というのは何でしょうか？」
「何てゆうんかなあ。」

「まず、私もついさっき聞いたばかりですのでまた訪ねてくるかも知れません。」

この部はさっきも伝えたように一昨日まで形もなく昨日できたばかりで、しかも最低限の人数しか知っておらず生徒会に情報が入ったのも朝になってからなのである。

「それは構いませんよ。いつでもいらして下さい。とりあえずお茶でもどうぞ。」

「有難う御座います。次にこの部はどういった経緯で作られたのですか？」

（自己満足のため、と知ったら怒られるだろうなあ。）

「この学校の治安維持にでも貢献しようかなと思って。」

（クククッ、ボランティアじゃない時点でこれも可笑しいけどな。どうするのか？）

「じゃあ何故部の活動が認められたのか教えて下さい。」

（あんなふざけた経緯を納得するか。それに、この質問真実言うことやばいからなあ。）

「けっこう熱心に言葉巧みに説明をしたら理事の方が折れてくれましたよ。」

「そうですか。でもいくら学校公認でも生徒会が許さなければ部としては認めませんよ。」

「どうすれば認めてもらえるんですか。」

「然るべき活動を行ってもらえれば、今のところは何の問題もありません。」

（以外と条件は低いな。もっとすごいこと言うかと思ったが。まあただの高校生の餓鬼の考えることと言ったらこの程度なのかもなあ）

「そればかりは口でいくら言っても仕方がないので、とりあえず待つてもらうしかありませんね。」

「わかりました。今日の所はこれぐらいでお暇致します。お茶美味しかったです。次に来た時に入れて下さいね。」

「はい、また来て下さい。篠原さん。いつでも歓迎しますよ。」

生徒会長か、最初に見た時はそうは思わなかったけど、案外しっかりしてるな。

あの人が会長なら生徒会もちゃんと機能するだろ。それにしてもわざわざやって来た割には大したことは言ってこなかったが何を考えているのか。あの人・・・どこぞのお嬢様なのか？動き方とか、何か強制されてるって感じなんだよな。・・・調べてみるか。

あとは活動については誰か来なきゃどうにもしづらいからなあ。成るようにしかないないからな。

もう遅くなってきたしさっさと作業終わらせて今日はもう帰るとするか。

生徒会長（後書き）

第二回目の紹介は上村君です。

上村 廉うえむら れん

O型 9月24日生

身長 155cm 体重 46kg

成績 中の上 得意科目 国語 苦手な科目 なし（岡崎の時にこの項目がなかったのはあいつには特に書くことが無かったからです）

容姿 上の中 かわいい系

好きなこと 今までは人を小馬鹿にすること。今は朝日の観察。

嫌なこと 身長のことについて言われること

趣味 読書

性格は岡崎と違って冷静で、中学に上がる前に家庭の事もあって一時必要最低限の会話しかしていなかったが、岡崎は他の人と違ってしつこかったので言葉を発してそのあと少しあって今に至っている。

作「第一回目が岡崎君だったことについてはどうですか？」

上「これぐらいの事は気にしませんよ。」

作「では、何かこの場で言いたいことは？」

上「過去の事はいづれ話します。以上で終わります。」

次回は会長さんに来てもらいます。

新入部員

普通に学校にやって来て今教室に向かっているのだが、いろんな人が見てくる。

たぶん、昨日の演説のせいなんだろうが少しうざいな。有名人はよく我慢してるよ。……。あ、でもあいつらは目立つのが仕事見たいなもんだから構わないのか。

この時朝日は気づいていないが、演説とは関係なしに見ている人たちもいるのだ。と言うよりその割合の方が高い。外国で暮らしていたことと本人の性格もありかなり色恋沙汰に疎いのである。

少し早く来た事もあった教室には10人程度しか来ていなかった。暇なので昨日話していない斜め前の人に話しかけることにした。

「おはよう。」

挨拶は基本だからな。

すると、少し周りを見たあとでやっと自分が話しかけられてるのに気づいたみたいに自分を指差したので、軽く頷いた。

「お、おはよう、朝日君」

少しおどおどしながらだが、ちゃんと挨拶をした。

「初めまして、名前なんて言うの？」

その初々しい様子を見て、フツ、と軽く微笑んで優しく聞いた。

「榊 結衣です、こちらこそよろしく。」

「ねえ、もしかして俺ってもしかするとかなり一年の中で有名になってるのかなあ？」

かなり気になっていたことなので聞いてみた。

「たぶんこの学校内の人はだいたい知ってると思うよ。」
順調だな。ていうか一日でここまで有名になるとは正直予想外だった。

「榊さんは昨日どこかの部活に入ったの？」

「入ってないよ。どこかの部には入らないといけないから来週中には決めないとイケないけどね。」

この学校は原則としてどこかの部活に所属しなくてはいけない、そして一年の内はちゃんと部活に出なければいけないという設立当初からの校則がある。

二年生になると帰宅部にも通えるようになる。

「もし決まらなかったら僕の部に入ってみる？」

正直冗談八分に聞いたのだが、

「ホントに！！昨日聞いた時から面白そうだなー、とは思ってたんだけどね。朝日君のこと全然知らなかったし何かいきずらくて。決まらなかったらその時はよろしくお願いするね。」

おいおい、マジかよ。あんな得体の知れないような部に入りたいとか普通思つかねえ。

なんかこの学校の常識は俺の普通には少しずれがあるように思えるな。

そんなのはここに居たら直ぐに身に着くようになると思うから今の内は特に気にすることでも無いと思うけど。

あと、だいぶ口調が軽くなったな。最初の時はかなりきよどつてたけど落ち着いたらこんななんだなー。

「おっはよう、明。2人で仲良く何話してたんだ。」

いつの間にか結構な人が来ていることに、岡崎に話しかけられて初めて気がついた。

「おう、おはようさん。部活なににするかって話してたんだ。で、お前は何処に入るのかもう決めたんか？」

「おう、よくぞ聞いてくれた実はな「おはよう、明君、榊さん。」狙ってたかのようなタイミングで話しかけて来た。

「ああ、おはよう。」

「おい、俺には挨拶無しかー!!」

「あ、居たんだ。ゴメンゴメン気づきたくなかったんだよ。」

上村はさらっと凄い事を言った。

「お前謝る気あるのか？まあ、良いけど別に、俺の心はもうそれはそれは素晴らしいほどに広がっているからな、現在進行形で。」

もう何時ものことなので気にしていられないらしい（本人談）

「そんなセリフがよく真顔で言えるなー。俺なら、というか日本中を探してもはにかみながらやっと言えるって人が大多数だと思うけどなあ。まあ、そこ”だけ”は極小と言っていい程の長所の中に加えてもいいんじゃないか？」

だけの所をかなり強調した。

「ところで、岡崎お前何言おうとしたんだ、さっき？」

上村が途中で入って来て遮られた岡崎の入部の件の話

「ふっ、待ってたぜ。その言葉……よく聞け、実はな「昨日僕と2人で話したんだけど。明君の部に入らしてくれないかな……いいよ別に俺なんかどうせ……」」
またしてもセリフを取られて今度は結構落ち込んでぶつぶつと独り言を呟きだした。

「俺は部員集めようと思ってたからちようどいいぜ。」
トントントン拍子で進んでいくな……フツ、深く考えるのは止めるか。折角の学園生活なんだしな。

《お前等席つけー、HR始めるぞー。》

「説明は放課後にでもやるわ。」

そして、今日も始まって行った……。

新入部員（後書き）

生徒会長ではなく1-Aの先生の紹介をすることにしました。

まるたに
丸谷

B型 38歳

職業 数学教師

身長182cm 体重 81kg

容姿 中の上いわゆる普通

好きな事 何もせずぼーっと過ごす事

嫌いな事 忙しくなった時

性格 面倒くさがり、厳しい

この人は27の時に結婚していてその年に出産もし三人家族であり、
今11歳の娘がいて実は朝日と接点が・・・・・・・・

「あなた結婚してたんですね。」

「はい、そうです。」

「どんな子なんですか？」

「・・・・・・・・・・さあ。」

「え？」

「・・・・・・・・・・もう終わりにしましょう。面倒くさいし。」

「あ、はい。じゃあ今回はこのくらいで。」

送り主を求めて 前編（前書き）

送り主を求めて 前編

放課後になり、二人を部室に案内したところである。

「・・・何、この部屋。」

入って最初の感想はこれだった。

「フツ、凄いだろ。」

もう呆気にとられて立ち尽くしている。

「まあ、座れよ。立ってないで
進められるがままに席に着いた。」

「で、・・・何か質問でも？」

「俺は別に。」

「僕も特には。これから何するかは、話してくれるだろうし。」

「よし、・・・でも今日はもう特に用はないから、そうだな・・・
・じゃあ昨日俺が話した箱取って来て。」

昨日の間に作って置いたのである。

「あー・・・確か質問箱のことか？」

「おう、よく覚えてたな。1日も前のことなのに。」
大層関心したように言った。その横で上村も、うんうん、と頷いて

いる。

「お前ら何気に俺を馬鹿にしてないか？」

「何言ってるんだよ。馬鹿にしてるに決まってるだろ。そんなことも確認しなきゃいけないくらいお前は馬鹿なのか？」

「…………ぐすっ」

少しやりすぎたようで涙ぐんでいる

「もういいからさっさと取ってこい!!」
そして、黙って取りに行った。

「慎重に運べよ…………。」

今、箱を取って来て中身を出したところである
箱の中には、手紙3通と紙が2枚入っていた。

「これ、どうするんだ…………」

「まず、手紙にどんなことが書いてあるんだ?…………そうだ、相談
をしたからどっかに来て下さい、とかだったら破り捨てといて。
あとその紙も同じようにして。」

岡崎がすべてに目を通していく。

「その条件に当てはまるのは手紙が2通と紙の方が1枚だ。」

で手紙の余った一枚を見てみると、
要約すると《一目ぼれしたので結婚して下さい♪M、I》とのこと
だった。

「・・・・・・・・・・これ・・・真剣なんか？」

まあ予想の範囲内だけだな、こういうのも。

「・・・・・・・・・・ドンマイ。」

「でも、なんでその条件を満たすものは捨てるの？」

上村が気を利かせて話を振った。

「・・・・・・・・あ、ああ、それはな。相談なるんならそっちから出向
いて下さいってのもあるしたぶんその場所に行ったらガラの悪い人
達に出くわしそうだからだ。」

「でも、違ったら・・・・・・・・」

全く、一から十まで言うのもなんだかなあ・・・。

「呼び出し場所見てみろよ。校舎裏とか近所の廃工場とかそんな
ばっかだろ。」

「あゝ・・・・・・・・おう。わかったわ。」

「ねえ、あと一つあるけど・・・・・・・・どうするの。」

皆で残った一枚の紙を見た。

そこには『初めまして、お会いしてみたいです。』とだけ達筆で書
かれていた・・・

「くっふっふっふっふ・・・」

面白いな、実に面白い。こんなに愉快なのは何週間ぶりかな。ああ、そうだ。胸糞悪い生意気で鉄火面の小学生の餓鬼を泣かした時以来だな、あいつの親が俺を訪てきたんだっただな・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あなたはいい年なのに子供を泣かして恥ずかしくないんですか！？」

この時のこの人の顔はもうそれはそれは面白かった。

「ふふっ、いや別に恥ずかしくはありませんよ。それに面白かったのでさっきまで笑っていた位ですから。・・・あの子には感謝してますよ、あんなに笑ったのは久方ぶりですから。」

すると、見る見る母親の顔が赤くなっていく・・・クック、どんだけ人を楽しませてくれるんだよこの人は。

「・・・あ、あなたねえ！！自分が何をしたか本当に分かっているんですかっ！！？」

「取り敢えず落ち着いて下さい。騒音はしようがないとしてもあなたの声を聞かせてあげたく有りませんから。」

「なっ！！どうしようもない人ですねあなたは！！」

煩いと言っただろ。はあっ、知能と言うものが存在しないのかこの人には！！

「僕は別にどうしようもなくありませんよ。それに僕が別にどうしようもない様な人だと言ってどうするんですか。そんなことを僕に言ってる暇があるんなら自分の子供を見てあげて下さい。」

「な、そんなことあなたに言われなくてもちゃんとやっています。やっと少し落ち着いたか。人以下並には脳があるみたいだな。」

「そうですかね、まあ別にそんなに興味はないですし言ってもうってことも無いんですね。」

「じゃあなんでもの子はあんなに生意気なんですかね。それであなたを見て少し思っただけですけど愛情とか足りてないんじゃないですか。あー僕はロマンチストじゃないですよ、言っときますけど。」

「さあ、なんて返してくるんだ。」

「余計な御世話ですし、うちは何時もちゃんと子供の望むようにしてきました。」

「クフフツ、余計な御世話だと思うなら聞き流せばいいだろ。」

「それはあんたの望みの間違いでは、それにただ単に甘やかしてるだけなんじゃないんですか？」

「ちゃんと躾はしてきました。学校の成績は何時も良いですし。学校の成績は関係ないだろ！！」

「それにしてもあの子の持っている物は何時も高価な物の気がするんですが？」

「うちはお金がありますから。子供の玩具や身だしものには不足していないだけですよ。」

誇らしげにそういった。

「あの子と一緒に遊んだりかはしてるんですか？」

「いいえ。一人でも遊ぶことはできますし、将来は一人で生きなくてはなりませんので。」

「あの子はまだ子供ですよ。」

「将来のためです。それにあの子にもそれが良いんですよ。」

「あなたほんとにそれで子供が喜んでも？」
この時まではまだ感情をコントロールできていた。

「はい、それに毎日笑顔で遊んでますからね。」

こいつ、・・・・・・そうかこいつかあの子から笑顔を取ったのは、ああの汚い笑顔に気がつかないとは浅はかな、
もういい、

さあ、もう終わりにしよう。

楽しい会話はもう終わり、いい加減こいつの相手は腹が立つ。

だが、ポーカーフフェイスは忘れちゃいけない。

見た目は気品を保ち、内部で処理する。

けれど、あくまで冷静に、心は熱く、脳はクールに、

ポーカーフフェイス、即ち 笑顔！！

いくぜっ、

「それじゃあ、あなたは思い出みたいな形も残らないようなものよりはつきりとした形のあるものの方が価値があるとでも？」

「つく・・・ま、まあそうですね。」

一瞬言いよんだがそれでも言葉を紡いだ。

「じゃあなんでたいした玩具も無い子が楽しそうにしている恵まれてるはずのあなたの子は年不相応な顔して機械的にゲームでもしてるんすかね？正直めっちゃめっちゃ見るのも嫌な顔してましたよ。そもそも何で泣いたのか分かって来てるのか？あの子が泣いた事だけ聞いてすぐ飛びだして来たんじゃねえだろうな？」

「あ、あの子が、言ってたんじゃなくて・・・近所のひとが、あなたと一緒に居たら公園で泣きだしたって。あの子を泣かせたのはあなたでしょう！！」

そうゆうことか、あの歩くプライドみたいな小生意気なやつが親ごときにくつつちゃべるとは思わなんだが、おっしゃべりめが。まあ、それだけ聞けたらもういいや。

「確かにそうですね、結果だけを取ったらそうです。だが俺はお前から親に対してのことを聞いていただけだぞ。」

「どういう」

「事かはもう自分で考えろ。子供には絶対に聞くなよ」

そして、外にだしてドアを閉めた、何も反応がなかったのでたぶんすぐ帰ったのだろう。

柄にもないことやっちゃったな。・・・さて、どうなることやら。

-
-
-

あの時のおばはんはほんと愉快だったな、今はどうしてるんだろ。

「おい、いい加減反応してくれよ。」

岡崎はさつきから様子がおかしいと思い呼びかけているのだが一向に反応してくれていなかった。

「悪いな、少し考え事をしてたんだ。」

時計を見るとあまり進んでいないのでどうやら俺が考え事をしていたのはせいぜい二分程度だったということらしい。

「で、どうすんだその紙。」

「ふふっ、会いに行くよ。」

当たり前だろ、ユニークな発想の人は俺は比較的好きだし。ぶつちやけ暇だからなあ。

「会いにいくたって誰なのか分んねえじゃん。」

そうこの紙には具体的なことが何一つ書かれていないのだ。
だが、

「大丈夫、なんとかなるから。」

と、不敵に笑って言った。

送り主を求めて 前編（後書き）

2話で3日前まで、とか言ってたが、あれは本当に1ヶ月前に日本にきたのだが、最後の準備のための少しの間だけ外国に一時また戻っていました。

第4回目は軽く行きます

今回女の子初の紹介です

榊^{さかき} 結衣^{ゆい}

A型 2月26日生

身長 152cm 体重 ?

成績 中の中 英語が得意で数学が苦手

容姿 上の下

運動神経 中の上

好きな事 ご飯を食べる事

嫌いな事 勉強

作「ご飯を食べるのが好きって、……体重どれくらいなんですか？」

榊「言えません。」

？「フツッ実はですね、じゅう「だめだよ、お願い止めて。」だそうです。」

作「そうですか、少し残念ですね。では、今回もこの辺で終わります。」

送り主を求めて 中編（前書き）

送り主を求めて 中編

「で、どうやって探すんだ？探しようがないだろ？」

岡崎は言葉だけ見るとやる気がないように見えるが、内心は自分では不可能だがこいつなら普通にやるんじゃないかねえか、と期待でいっぱいになっている。

「うーん・・・まだ今の時点ではヒントが少なすぎて俺にもはつきりとはわかつちやいないんだ。でもまあ、お前にも脳味噌があるだから自分で少しは考えな。」

上村はまるでハテナマークをいくつも浮かべてそんな感じで悩みだした。

「それで、これからどうするの？」

すると、立ち上がったいつもの笑顔に加えて口の端を吊り上げて

「期待して着いてきな。」

と言って歩いて行く背中をすぐに二人が追いかけて行った。

今、運動場の端の

「あ、来てくれたんだ♪」

俺たちは異様なほどハイテンションな子の前に来ている。今にも跳ね跳びそうにしている。

「おい、朝日・・・お前これはどういうことだ？」

と呆れたような感じで岡崎は言い、

上村に至っては

「・・・・・・・・・・・・・・・・」ずっと無言でしかも我関せずといった様にずっと部活をしている人をぼろっと見ている。

「直ぐに済ませるから少し黙っとけ。これも大事なことなんだ」それで、上村は少し煩かったのだが静かになった。

「あの手紙はどういうことですか？あと、あなたは 石桐 真衣さんであっていますか？確か2年生であってますよね？」

「そうだよ♪」

この言葉に最初に反応したのは上村だった。

「ちょっと待ってくれ、・・・お前ってここ来たばかりだろ。なんで先輩の名前なんて知ってるんだ。」

まったく話の腰を折るなよ。質問は後にしろよな。

「それはこの学校の名簿を俺が持っていて、さらに有名な人はもう覚えてたからだ。この人は部活での実績に加えてこの容姿でこの学校で10位以内に入る知名度だ。分かったら今度からツツコミは終わってからな。」

「・・・・・・・・あ、ああ、わかった。」

よし、分かってくれたか。

「で、どうゆうことなんですかあの手紙は？」

他に聞きたい事もあるがこれもかなり興味があることなので聞いておく事にした。

「どうもこうも書いてあった通りだよ♪」

「はい、わかりました。で、何時あなたは俺と会ったことはありますか？」

「昨日廊下で私が見たんだよ。」

昨日・・・そうかあれだけ目立ってたからなあ。

物好きだな、この人も。俺見たいなのどこがいいんだか。

「返事をしろと言われたら断りますよ。内容がぶっ飛びすぎですから。」

「うん、そう言われると思って書いたから。じゃあ、まずは友達になって。」

分かってて書いたのか、・・・フツ。

「分かりました。ところで、手紙を箱に入れたのはいつなんですか？ 正確にじゃなくて何と無くでも構いませんよ、いつぐらいだったとかでも。」

これは大事なことだからな。

「うーん・・・部活が終わってからだというのはわかってるんだけど・・・」

そうか、これで候補が狭まったな。

「フツ、それだけ分かれば十分です。ありがとう御座いました。もう今日は行きますけど、またあなたに会いに来ます、では、頑張ってください。」

そう言って、部屋から出た時のように一人で背中を向けて歩いて行くその背中を遅れて二人が着いて行った。

「またね〜♪」

その後ろにはニコニコと笑いながら手を振っていた。

朝日は来た道を辿るように歩いて行ってそのまま元の場所に帰って来た。

部室に戻って来てもしかばらく黙って座っていて部屋が変な空気に包まれていた。だが岡崎は沈黙に耐えきれずに声を発した。

「ここに戻って来てどうするんだ？」

「もうすぐここを客人が訪ねてくると思うのでお出迎えをするんですよ。」

今は気分がかなり良いらしく口調がいつもと違っている様だ。

「・・・客人？」

「そ、客人。もうすぐ来るはずだよ。それより、・・・聞きたい事があるなら後で聞くから途中で口を挟むのはなしにしてくれな。」

少し威圧を掛けながら言ったので、2人は一瞬身震いしてから、「わかった。」と答えた。

すると、噂をすればとでも言うようなタイミングで部屋のドアが二回ノックされた。

「入って来て下さい。」

その言葉を聞いてすぐに「失礼します。」と言って入って来た。

「今日は何の用ですか、篠原先輩。……まあ、とりあえず掛けて下さい。」

ソファーに腰を掛けるとすぐに話した。

「それでは、端的に述べます。今日は部費の申請の件で伺いました。こちらとしてはまだ設立されたばかりで実績も無いこの部には申請されても大した額は払えませんけど構いませんか？」
昨日の作業はこの件についてである。

「構いませんよ、元よりそのつもりですから。それより篠原先輩、昨日は僕が帰る時にはまだ生徒会室の明かりがついていたんですが、最後に帰ったのはあなたですか？」

朝日が帰る時にはもう運動部の人もほとんど残っておらず校舎内は職員室と生徒会室を除いて明かりはもう点いていなかった。

「いえ、最後に帰ったのは副会長です。彼はやることがある、と言って残りましたから。」

「そうですか、では今日会長はいつも登校してきているのは何時頃ですか？」

答えてくれるかどうか……

「そうですねえ……挨拶運動をしているので8時頃でしょう。はつきりとはわかりません。」

「では、最後にします。副会長はあなたより登校してくるのは後ですか？先ですか？」

「いつも彼は遅刻しそうなほどギリギリの時間に学校に来ますよ。遅刻しない程度ですけど。あ、でも昨日は危なかったですよ、それと・・・・・・・・・・・・・・・・」

少し話に熱が入って来てそのまま喋りつづけているが、朝日は考え事をしだしたので全くと言っていい程聞いていない。

そうか・・・・・・・・あの人か。でも、なんでだ。

まあそれはこれから聞きに行くからいいか。

それにしてもこの人、止めなかったらいつまでしゃべるんだろう。というか意外だな。もっとお堅い人って感じがしたんだけどな。まあ、俺も用事ができたから止めるけど、

それでねえ「先輩!!」・・・・なんですか？」

いきなり話に入って来られたので少し驚いたがさすがと言ったところであまり派手なりアクションを取ったりはしなかった。

「僕としてはこのままあなたと楽しく雑談をしていても構わないんですが、先輩はいつまでもここに留まっている訳にはいかないんじゃないかと思ひまして。いついとしても構わないので話はまた今度にしませんか？」

この言葉は、嘘が7割なので嘘の占める割合の方が遙かに高いのだが、相手の方はそんなことは分からないので、嬉しいと思っている。それと言うのもこの人は、生徒会長をやっていることに加えて結構な容姿なので周りからは少し敬遠されていて、あまり友達などおらず男の子としゃべるのは、親か事務的に生徒や先生と話す程度なので、男の子と話す機会が出来て嬉しいのである。

「はい、それでは今度は暇な時に事務的な用事は関係なくお邪魔させていただきます。」

「是非またいらして下さい。今度はお茶菓子でも御馳走しますよ。」
そして、入る時より少し元気になって出て行った。

「なあ、生徒会長ってあんな感じだったのか？俺はもっとお堅い人だと思ってたんだけど。」

さっきまで部屋の隅で黙っていた岡崎がソファに座って聞いてくる。

「よくは知らんが俺も遂に2、3分前の一人でしゃべり続ける可笑しな姿を見るまでは人とのコミュニケーションがうまくできずに友達があまりできないお堅い会長だと思っていたから俺も結構驚いているぞ。」

「……お前ってそんなだったっけか？」

昨日も今日もこんなに毒舌だとは思っていなかったなので岡崎はもちろんいままでさして興味も無さそうに部屋の外を見ていた上村も会長のこともそうだがそれよりも遙かに驚いている。

「二人が俺をどう思っていたかは俺には分からないが人間なんて誰にも予想できないような部分を持ってるもんだぞ。例えば、俺らに授業を教えている国語の中村先生だが、あの人は学校で交際をしている人なんかが目の前にいるいつも注意している様な人らしいが、自分は週に一回はキャバクラやクラブにいったってセクハラ行為をする嫌な常連客をやっているらしいぞ。このように人にはわからない別の一面が人にはあるように、俺にもこういう毒を吐くような一面があるんだよ。わかったか？」

「「わかりました。」」

聞かれてすぐに二人ともほぼ同時に頷きながら答えた。

（え〜っ、まず何であいつは普段先生がどうしてるとか知ってるんだよ。あと、俺明日からどういう顔してあの先生の授業受ければいいんだよ。絶対まともにあの先生見れねえぞ。）

とそんな反応を岡崎はしているのに対し、

上村は

（す、凄いいいいい！！さすが一目見た時から普通の人とは違うと思っていたけどここまでやるなんて思わなかったよー。）

とかなりかわった反応を示している人もいた。

余談だが岡崎が次の日に思わず暴露してしまったことが切っ掛けにどんどん話しが広まり一日で全校生徒の知るところとなって二日後には誰もその先生を見なくなった（中村先生猥褻失踪事件）ので皆、気持ち半ばで本気では噂を信じていなかったがこの失踪が起きた事で、皆が話しを信じそして、この噂の発信元である朝日の事も同時に広まり一部の者は尊敬し、ほとんどのものは少し怖く感じて、部に対して反発的な態度を取る人も減り、岡崎の考えも杞憂に終わるのである。

「おい、二人とも目覚めろー」ビシュッ、ドスッ、ボスッ。

さっきから声を掛けても反応しないのでなぜか近くにあったボールを岡崎に、クッションを上村に投げた。

「おい！！何するんだよ。」

結構本気で怒っているようであるが、

「目的の人物に今から会いに行くから起こしたんだ。」
と言われてすぐに怒りは引いていく。

「それって誰？」

今度は10秒前とは全く違って嬉しそうに聞いてきた。

「今から行くって言っただろ。期待してついてきな。」

また一人で先に部屋を出て行き、そのあとを二人が黙って着いて行った。

送り主を求めて 中編（後書き）

第5回目始めます

篠原 朱音

役職 生徒会会長

O型 10月5日生

身長156cm 体重□□kg

成績 上の下 運動神経 中の下

容姿 上の下 奇麗という言葉などが似合う

好きな事 皆と居る時

嫌いな事 一人でいる事

性格 内気、寂しがり、しっかり者、素直

内気な性格なことと家柄が良い事もあって周りの人があまり話しかけてこず友達が生徒会のメンバー以外出来なくて、会話もほとんど生徒会でしかできないのが悩みだった。が、朝日はまだ1年生なの

にも関わらず自分に物怖じしなかったので生徒会の方々以上に気になっている様だが・・・・・・・・・・？

作「では、今回は生徒会長さんです。」

篠「よろしくお願いします。」

作「早速質問です、結構いい家に住んでいるようですが、どのような感じで？」

篠「あんまり言いたくないんですが、まあ普通の人の家の数倍位です。」

？「フフツ、その言い方だと確実に4，5倍以上はありそうですね。」

篠「そ、そんなこと・・・・・・・・」

？「え、もつとあるって。ほうほう、じゃあ庭でサッカーができるぐらいということですね。」

篠「・・・・・・・・はい」

作「今回もこれ位で終わりにします。」

送り主を求めて 後編

朝日が立ち止まった場所えお見てみると生徒会室だった。

「なんで生徒会室？」

岡崎は誰に聞くでも無く呟いた。

「ここに俺に会いたいという人がいるからだよ。あ、ここでも暫くは静かにしててね。約束できないのなら連れて行きませんか？」

二人は頷いて肯定を伝える。

「破ったら、・・・・・・・・・・・・・・・・フッフッ」

言葉を途中で切って、なにかを考えるそぶりをしてから不敵にほほ笑んだ。

そして、ドアの前まで行って部屋をノックすると、暫くして中から「どうぞ。」という男の人の声が聞いて、

「失礼します。」とだけ言ってすぐに入っていくのを見て二人も遅れて朝日に続いて入って行った。

「生徒会の残りの人はお帰りですか？」

辺りをキョロキョロと見ながら言った。

「そうだね、僕以外は特に残る必要はなかったからね」

生徒会のメンバーは彼以外にもあと3名いるのだが、他の人はもう

先に帰り一人が残っていた。

朝日は近くにあった回転椅子に座って、足を組み膝の上に肩肘を乗せながら言う。

「初めまして、諸菱副会長」

「こちらこそ、初めまして 朝日君。お目に掛かれて嬉しいよ。今日はなんの用で」

少しの間見つめあっていたが、朝日がクツクツ、と笑ってからしゃべり始めた。

「呼び出しておいでよく言いますねえ。まあ、今日は特にすること無かったので暇つぶし程度にはなりました。一樣感謝しておきます」

「フフツ、ゴメンゴメン。それにしても随分早かったね。」

「大体は予想通りだったんじゃないんですか。……まあ、予想よりは早かったようですが、そうじゃなかったらこんな時間まで一人が残ってる必要ないでしょう。どうしてここまで来れたのか説明がほしいのかもしれませんが……聞きたいですか？」

それまで朝日の眼は、部屋を品定めでもするように忙しく動きまわっていたが、最後の言葉の前にゆっくりと目を閉じて、口が開くのと同時に目を相手の視線と交差させるようにして言った。

思はず動揺して息をのんだが、一息吐くと直ぐに冷静な表情に戻してから答えた。

「じゃあ、聞かせてくれるかな？」

今までも十分なほど笑顔ではいたが、返答を聞いた瞬間にさらに大

きな微笑みを浮かべた。

「説明してもいいんですけど……僕も少しは頑張ったんですよ。少しでも何か利益がないと……ねえ？」

「……………」

あごに手を置いて考え出した。

「フッフ、そう難しく考える必要はありませんよ。本当に大した事を要求する訳じゃありません。そこまで手が掛った訳でもありませんし……………」

「俺に何をして欲しいんだ？」

「物分かりが良いですね。でも、今は特にやって欲しい事もないんです。また今度ってことになりますかね。それでも良いですか？」

（こいつ…………でも気にはなってることだからなあ。仕方ない）
はあっ、と一度溜息をついてから言った。

「分かった。話を続けてくれ」

フッフッフ、言ってみるもんだな。ここまでスムーズに事が運ぶとは思わなかった。会長の方は意外としっかりしてるって感じたが、副会長の方は少し抜けてるのか？ いいところまではつけそうだけど最後まではいけないって所かな？ 後、頭の回転は速そうだけど絶対この人口下手だな。考えることはできても言葉が出てこないタイプか。何にしても、この人の分析はあとにするか？ 3人共気になるって顔してるし。

「ふむ、何処から話そうか……………」

「じゃあ副会長が紙

を入れた時間からですかね。これを話したらもう全てと言ってもいい程解決しますし、ちなみに入れたのは6時半〜8時までの間って所ですよね？」

「正確には分からんが多分そんな所だろう」

朝日は予想通りといったように軽く二、三回頷く。

「まず最初にあの箱のことですがあれを今日見た時はまだ新品同様だったので乱暴に扱われてはいませんでした。そして、簡単にですが固定していました。箱を運ぶ時も慎重にやらせましたし、あれ自体そんなに大きなサイズではありません。以上、4つのことからわかるのは中身が混ぜられたりはしていない、即ち……………」

そして、あなたからの Letter は二つ目にありました。な、の、で、前後を調べると漠然とですがなんとその手紙をいつ頃入れたかがわかるんです。」

「そして、後ろの方の手紙に至っては調べるまでもありません。それは、あなたが入れた紙が俺が朝に箱の側に置いておいた紙とは違ったからですよ。」

ここで諸菱が何か引っかかった。

「ちょっと待てよ。……………そんな紙置いてあるからって使うもんなんか？ていうかお前より俺が早く来て入れたんなら関係なく無いか？」

朝日は自分の話を止めるぐらいだから何なんだろうと期待して聞いた割には全然大した事の無い事を聞かれたので残念に思い、一度溜息を吐いてからまた喋り始めた。

「そんなこと聞かれなくてもちゃんとお答えしますよ。あーーじゃ

あまず紙を使う理由ですけど岡崎、話してあげて。」

「お、おれえ!!」

もう完全にぼーっとしていて殆ど聞いていなかったのだから焦っていたが姿勢を少し正すと落ち着いたみたいだった。

「えーっとし、たぶん紙のところにこれじゃなきゃダメみたいなことが書いてあったと思うけど……」

はつきりと覚えている訳じゃないのであたふたしながら言った。

「そう、そういうこと。とりあえず一つ目は分かりましたか。」

この言葉を聞いた時岡崎はとてもほっとした。

「ああ、分かった。」

「で、早くから来たんじゃないかっ、ていうのはないですよ。生徒会長に聞きましたし、あなたの登校時間。」

「あー、そうゆうことか。分かった分かった、続けて。」

ちょっと待てよ、これは演技にも見えんし。生徒会長を今日俺らのところに寄こしたのはこいつじゃあねえのか。俺はてっきり自分の所にたどり着きやすくなるためのヒントにでもさせるためだと思っただが。こいつはあまり考えたりしないタイプなのか。それか……クククッ、別の誰かがなんかしているのかな。

「次はあなたの前に入れた時間ですが、これもかなり簡単でしたよ。本人に直接聞きましたしね。聞くところによると、部活が終わってからと言っていてあの部は熱心なので、恐らく6時半以降です。で、まとめると6時半〜学校が完全閉鎖されるまでに誰かが入

れたということになります。最もあなた以外の人なら朝の俺が来るまでに入れたというのもいけるんですが……まず、あの紙から推測するに一般生徒が入れたものでは無いんです。あの紙にこの学校の名前が書いてありましたから。普通にノートの切れ端とかならあなたのものだという可能性はだいぶ低くなりますけど。」

「これらの条件で考えると、もう生徒会の人間もしくは先生ぐらいまでに絞れます。」

諸菱がここでまた何かを言おうとするが、それよりも先に朝日が答える。

「また、生徒会の人間であなた以外なら朝からでもいけんじゃねえのって思いうかも知れませんがあなたがあなたたちはご丁寧に朝に挨拶をしているので無理ですね。俺はそれよりも今日は早く来ましたから。」

「で、俺はこの考えまで至った時にはあなたが送り主だと判断しました。些細なことですけどね。俺が会長に昨日最後に帰った人は誰ですかって訊いたらあの人は せんぱい 彼はやるべきことがある と言っ
て残ったと話してくれました。

ここからは少し自分の勘も入るんですけどね。この言葉ね、言い換えたら分かりやすくなりますよ……今日は何か特別な用があるから残る……みたいな。俺が思うにいつものように何かやってるような人に対して使うような言葉じゃないと思うんです、会長の言葉は。

こう考えると何で今日に限ってってなるでしょ。それでももしこの人が送って来たんなら、と考えてみて実際ここにきてみたら、……・ドンピシャ、やっぱりあなただったんですよ。まあ最後当たりは今も言ったように勘も入ってるんですけど、当たってて良かったですわ。」

全で一気に喋ってから一息ついて、

「何か口出しするところはありますか？」

と聞いたが先輩もほとんど思うことはもうないらしいので一つだけ、御紋が浮かんできた。

「じゃあ、最後の判断は勘に任せたのか？」

その間に朝日は、ハハッ、と笑って

「勘って結構大事ですよ。」

なぜかこのフレーズには言葉では表せれないような説得感を諸菱は感じて納得してしまうのだった。

本当はこの人が会長を俺の所に寄こしたと思って会長に口出せる人はだ〜れだ、って考えたからなんだけど、どうやら違うみたいだしなあ。結果がついてきたから良しとするけどな。ふうっ、もう終わったし、

「先輩、今日の所はもう終わりにしましょう。」

「そうだな、結構時間経ったからな。」

時計を見てみると最初にここに来た時から時計の長針が反対まで進んでいることが分かった。

「今日は中々楽しかったですよ。では、またの機会に。……………」
「……行こうぜ。」

今回も何時もと同じように勝手に一人で帰るのかと思ったが今回は二人に声を掛けて揃ってから部屋の外に出て行った。

三人が去って行ったあとにはしばしの静寂が生徒会室を包んでいたが、誰かが入ってくることで破られた。

？ 「・・・・・・・・・・やっぱり、なかなかやりますねえ、彼は。たぶん僕みたいな存在にも、もう気づいてると思いますよ。」

諸菱 「そうなんですかあ？俺にははっきりとは分からなかったですけど？」

？ 「彼は凄い、・・・・・・・・・・いや、凄かったですよ。少し前までは今と全然違ったんですよ・・・・・・・・・・そう、崇拜さえしていた程に。」

男は少し前のことを思って、どこを見るでも無しに目をグラウンドの方に向けた。

諸菱 「見てみたいですね・・・・・・・・・・どんなふうなのか。」
さぞ興味心身と言ったように話しかける。

？ 「いずれ・・・・・・・・・・いずれ見れるようになりますよ。」
そう言ったきり、もう言葉を交わすことはなくなった。

そんな重い空気が流れてる生徒会室とは違って、裁判部部室は澆刺としていた。

「いっやゝっ、それにしても凄かったなあ。お前の推理!!」

岡崎が声量も落とさずに言うのと、

「凄かったよねゝっ、先輩の動揺っぷりと君のビビりっぷりは。」
上村が返す。

「し、仕方ねえだろー。いきなり振られたんだから。」

その時の光景を思い出して朝日が大きな声で爆笑しだした。

「はっはっはっはっは、ひー、た、確かに、フツッ、お前の、ビビり方は、以上だったな。」

上村は笑い声は控え目だが、言葉をきつく出した。

「その前から君は皆に何か言われるたびにビビっていただろ。・・・
・・・・・・ボソッ（特に中学一、二年の時とか）。」

最後の言葉の直前に皆がちょうど静かになっていたので、声は小さかったが部屋中に届いた。

「へー、興味あるなあ。どんな中学校生活送ってたんだ？」

朝日が言うのと直ぐに、

「お願いします。聞かないで下さい。調べないで下さい。お願いします。」

ます。」

床に両足を付けて両の手を前に付き頭を何度も下げる、いわゆる土下座をしながら頼むので、流石に朝日も、

「分かった、分かった、聞かねえから。……ボソッ（お前の前では）。」

最後の言葉なんて聞いてない岡崎は「ありがとう。俺の親友よー」と言いながら手を握って縦に数回振り回した。

「ん、そういえば、お前らって何時からの知合いなんだ？」

岡崎に振り回されたのがうっとおしかったから話してから聞いた。

「あー、……確か小学校の時からだと思う。」

少し不安になったので上村の方を見ると頷いたので間違いないだろう。

小学生……か。あの時までは楽しかったな。別の意味であれからも楽しくは過ごせていたんだが……な。

「どうしたんだ、お前？」

いつもと様子が違うようにみえたので疑問に感じた。それは上村も同じだった

フッ、まったくこいつら。

「フッ、少したそがれてただけだよ。」

……俺には過去も大事だけど、今を楽しむって決めたんだったよな。ハハッ、一人で考えてたらまた後ろを向くところだった。

そして、心の中でだけ二人に感謝して、

「おい！！もう遅いからそろそろ帰るぞー。」
部室のカギを閉めて帰って行った。

過去は過去

変わることのない絶対

自分の主観で多少は変わるが変わらない

だからぼくは前を向こう

変えるためには前を見よう

ぼくの後ろは絶壁で

ぼくの前にはわずかな光

だったらぼくはそれを目指してがむしゃらにもがいてもがいてすが
りつく

その先になにかがあるんじゃないかと・・・・・・・・期待して

送り主を求めて 後編（後書き）

紹介 part 6

諸菱 もうひし かずと 一登

役職 生徒会副会長

身長 184 cm

容姿 上の下 この人よりカッコいい人はまだ学校にいるのだが、
たち振る舞いなどを考慮するので、この人はその人達より人気があ
る。

成績 上の中

運動神経 上の下

性格 あっさりしていて、思い立ったら吉日タイプ

この人の家もかなりのレベルであり、加えてもてる要素の三拍子も
ありさらに副会長も兼任しており、人気が出ない訳はない。

今回影ながら朝日を見ていて朝日の昔の事を知っている（？）人と
コンタクトを取れるようだが・・・・・・・・・？

臨時教師

副会長に会った次の日の金曜日の国語の授業では臨時で他のクラスの担当の人がおこなったのだが、次から休みの日に入るということでその間に何とか代わりの先生を探そうと、校長と教頭がいろいろと動いたのだが、なかなか見つからなくて途方に暮れていた。

校長も教頭も土曜日は、他の仕事もこなしつつ先生探しをしていたので、ソファアーにかなり疲労した様子で座り込んでいた。

だが、突然電話がかかってきた。

二人の内教頭の方が近くにいたので電話を取りに行った。

誰だろう、とは思いつた表示を確認したが非通知、と出ているので誰からかは分からなかったが受話器を上げて耳につけた。

「フフフツ、電話にはなるべくすぐに出るようにして下さいね。」

「・・・ッ!」

教頭はこの笑い声を聞いた瞬間に、吃驚して受話器を落としそうになった。手が少し震えているのだ。

「・・・・・・・・落ち着いて下さい。大した用ではありませんから。」

まるで、自分の近くで見ているかのように言われて、落ち着けとい

われたのにさっきより動揺してしまう。

「フフツ、僕がわざわざ電話を掛けたのは、あなたと校長がお困りのようだったからなんですよ。少しアドバイスでも、と思って。校長先生と相談してみてください。五分程待っています。その間に決めて下さい、……僕としては、シンプルな答えが良いですね、では5分後にまた掛けます。」

そう言うのと直ぐに、相手が通話を切った。

電話越しの相手は名乗りこそしなかったが、最初に聞いた笑い声で相手が今回のこの事件の発端となった生徒だと安易に想像できた。

そして、話を聞き終えて少しすると校長の方を向いて落ち着きのない沈んだ声でゆっくり今あったことを話し始めた。

「こ、校長う、……あ、朝日から、電話がかかってきました。」

「……ッ!!」

明らかに教頭の様子が可笑しかったので、何事だ、と思っていたが朝日からの電話だと聞くと、目を見開いてぶるっと震えた。

30秒程二人を沈黙が包んでいたが、時間の経過と共に落ちてきてきたので、覚悟を決めて話の内容を確かめることにした。

「……で、何と言ってきたんだ。」

「…………どうやら、今のこの私達の状況を知っているようで、
…………アドバイスをしてあげようか、校長と二人で話し合って
決めろ、五分の時間をやるからその間に決めろ。と言っていました。」

それを聞いて校長は少し安心して、
「…………そうか…………。」

とだけ言って腕時計を時計をちらっと見て、考え始めた。

今度は二分ほどたったのち

「仕方がないな。」

とだけ言った。

この言葉に教頭は特に異議も無く黙って頷いた。

プルルルルルルッ、プルルルルルルッ。

そして、二人の意見が纏まったところでうまい具合に電話が動き出した。

今度は校長が受話器を取った。

「クフフッ、それで、どうなりましたか？一様聞かせて下さい。」

まるでどうなるのかが分かっている様にも聞こえる。

「…………お受けします。…………条件もできる範囲でなら…………。」

出来ることなら、こんなことをお願いしたくはないのだが、そんな感じで答えた。

「フフフツ、さっきはそこまで話したつもりはなかったんですが、フフツ、話が早くて助かりますね。大した事は要求しません、安心して下さい。」

電話越しでもはっきりとわかった。こいつは、私達の反応を想像して嘲笑っている。…………いや、もっと単純にただただ楽しんでいただけなのかもしれない。

そう思うと、体に寒気がして体が少し震えた。

「フフフツ、二週間後にこの学校で、宿泊オリエンテーションがありますよね。あれ、いまいち盛り上がり欠けていると思いませんか？僕は全くと言っていいほど興味がありません。多分このままだと他のみんなも旅行中はしゃぐとは思いますが、終わったら不満が残るでしょう。で、結局何が言いたいのかと言うと、何か面白くなりそうな行事を行って下さい。僕が少しでも退屈が凌げたら構いません。でも、いきなりこんなことを言われても老人の硬い頭じゃあなにも思いつかないかもしれません。もしアイデアが何も浮かばないようなら、……………副会長に協力してもらってください。」

副会長の事がなぜでてくるのか、まったく分からなかったがもう気にしない方が為になるんじゃないかと思ったので、ほおっておくことにした。

日が変わって今は月曜日の朝のHR前の時間で、朝日、上村、岡崎の定番になりつつる三人と榊さんで話しているところである。

「……………だったんだ。」

岡崎が日曜にあったことを話していた。

「はあつ、どうせ話すなら少しでも良いから有益な情報を提供するかユーモアのある面白い話にしてくれ。長々と詰まらんことを話したいならくまさん人形相手にしてくれよ。」

岡崎はもう話に加わっているのかも怪しい、よっぽど岡崎がつまらない事を言っていたのだろう。

「え、俺の話ってそんなに面白くなかった？ねえ、榊さん。」

この問いかけに、ははっ、と苦笑いで答えた。

「良かったな、面白くなかったってさ。」

「そのどこに良い要素があるんだ？」

などと下らないことを話していると、少し教室が騒がしくなっていることに気づいた。

「どうしたんだ、夏目。」

夏目 修一 こいつは今新聞部に属しており、結構学校の最新情報や過去のことに詳しい人物である。そして、金曜日から朝日の事を奇抜な部活のかつこいい帰国子女という考えから、当学校の尊敬できる人ランキングに入賞することとなった。

朝日はこのことを使える人物が増えたとひそかに思っている。

ちなみに、新聞部も変わった部活でこの部に入るには何かのスクー
プを持っていくか、この部の部長にスカウトされるかでしか入れな
く、夏目は前者だが、後者の条件に当て嵌まり、朝日は現在勧誘を
受けている。

呼ばれた夏目が教室の端から朝日の所に移動してきて答える。

「それがですね。先輩が言ってたんですけど、今日国語科の後任の
先生が来るらしいんですが、まだどんな人かまでは分かってなくて
どんな人なんだろうって話してたんです。」

このクラスは国語科の先生が副担をやっていて、担任がめんどくさ
がりなので実質今日入ってくる人が担任みたいなものになるだろう
と考えているので他のクラスより重大な問題である。

「ああ、その話か。それならおれ知ってるぞ。」
「なんたって俺が紹介したんだからな。まあ、知ってるって言っても
経歴と名前と実績ぐらいだけだな。」

朝日が知ってると言ったらみんなが話すのをやめてこちらを向いた。誰が聞こうか、てな感じの空気が漂っていたが、それは突然入って来た人によって直ぐに破られた。

「その情報は新聞部にくないだろうか？」

突然入ってきたのは現副部長の小枝だった。主にこの人と他数名の部員が情報を集めて、部長とその補佐の人が記事にするという段取りであり、実は小枝はずっと1-Aの教室前と職員室をマークしていたのですぐに現れたのである。

「少し俺を買い被ってますよ、俺が知ってるのなんて大したことじゃありません。それに教えちゃいけないことと教えていいときってのがありますから。」

「……………そうか、分かった。今回は潔くしておこう。」

大分聞き分けが良いのか、ちょっと考えた後以外と直ぐに妥協して帰って行った。

「お前らも、俺から聞かなくてももうすぐ来るから席着いてワクワク、ウキウキと面白可笑しく妄想でもして待ってる。」

もう30分を回っているので教室内の人がほぼ全員が心の中で妄想じゃなくて想像なのでは、と思いながら椅子に座って行った。

すると、いい具合に担任がきてHRが始まる。

「あー、まあ今日も特に伝えておくことはないんでこれで終わりたい所なんですけど、今日から臨時としてこの学校で採用すること

に決まった先生がいるので、……ほら、あの国語の先生の代わりの。んー……入ってきて下さい。」

先生が呼ぶと、失礼します、と言ってから入って来た。

教卓の後ろまで来て一度こちらに頭を下げてから、黒板に名前を書いてからゆっくりと緊張しながら話し始めた。

「えーっと、私は今日から暫くここでお世話になる　鳴海　真奈です。」

まだ全然頼りないんですけど一生懸命頑張るんでよろしく願います。」

男子がかなり女子よりも騒がしくなっている。気持ちとは分らんが予想は付く。まあ、前みたいになちっこくてももない先生よりも年は20半ばで身長は平均的で何より顔が綺麗な先生の方が良いかな。

少し喧しいな黙らせるか、

「こちらこそよろしく願います。鳴海先生僕らも全然なので一緒に頑張らしよう。」

朝日が少し大きな声で言ったので静かになり、頭を下げると皆つられて頭を下げて、拍手をしたら皆続いて拍手をした。やがて、拍手が止むと丸谷が手を叩いてから

「はい、今は質問は受け付けないので後にしてください。では、先生行きましょう。」

何か俺の時と似てるけどなんか違うんだよな、今回と。まず、先生
の俺に対する対応がもっと雑だったし、クラスのやつは……
そうだ、今日は誰か来るってわかってたからなんだ。俺の時には多
分まだ夏目が新聞部じゃなかったんだろ。何かめっちゃ戸惑っ
てたからな。それにしても、あんな感じの人か、見た目はしっかり
してそうなんだけどな。

今日、国語は……午後からか、どうなるのかなあ。

楽しみだな。

昼飯時の一騒動

午前中は特に何事もなく、昼休みになった。

机のものを全部かたずけたあとに

「今日はどうする」、と上村が言ったので、

朝日は一度見てみたかったらしく、

「今日は食堂に行って食おう」と答えたので食堂に行って昼食を食べることになった。

（ホントーに食糧確保合戦ってたいへんなかなー。）

元より岡崎は食堂に行く予定だったので、

「俺先に行くから場所取っというて。」

と言って教室を飛び出して行った。

他の人もちらほらといそいで食堂に向かって教室を出て行って静かになったところで、

「俺らも行こうぜ。」

と、声を掛けた。

朝日と上村は鞆からなにもプリントされていなく地味な色をした包みに包まれている弁当を取り出すとゆっくりとした足取りで食堂に向かって歩いて行った。

食堂について直ぐの所に空席が少しあったのでそこに岡崎の席の所に包みを置いておいて二人は向かい合うような形で座った。

「なかなか活気があるなあ。なあ、もう先に食べ始めとかねえか？別にあいづをまって食ってもなんもないだろ。しいて言えば、あいづが少し喧しくなりそうだってとこだけだろ。」

特に反対することもないので先に食べ始めておくことにした。

食堂の中は教室と違って生徒の数もかなり多く、それに購買の方は食料の確保のためかひとときわ騒がしかった。

「そうだね。僕も今日まで来ること無かったから全然知らなかったよ。」

岡崎はもう何回か来ているらしいが、上村はずっと弁当でいつも教室で食べていたので今日が初めてらしい。

「そうなんか。……でも、こうゆうのも悪くないな。お、先生も結構いるなあ。」

この学校の学食はメニューが多くあって、値段も安いので先生方に人気があり先生の半分以上がここで昼を済ましている。なんでもメニューが多いのは先生方の意向だそうだ。（新聞部談）

「あれーっ、俺らの担任が来てないぞ。」

あの面倒くさがりが弁当、……そうか、いや、でもまさかな。

「僕らの担任なら職員室で弁当を食べてるよ。」

「コンビニによって買って来てるのか？」

「え、知らないの。あの人もう結婚してるんだよ。奥さんがよくできらってことでこの学校では結構有名なことなんだけど。明君なら普通に知ってると思ったんだけど。」

クツ、あいつは結婚なんてありえないだろうと思ってリサーチなんて全然してなかったからなあ。人は見かけで判断するな、という言葉葉を浸透させた人はホント凄いな。

「……………ん、誰か僕にいちやもんをつけているみたいだね。……………誰だ全く見つけたら……………フツ。」

ビクツ、うおっいきなり何か寒気がしたぞ。

「大丈夫、少しおかしかったよ。」
突然ブルツ、と震えたので不思議に思った。

「ああ、……………たぶん大丈夫だ。」

「ふう、待たせたなっ、てかもう食べ始めてんのか。ちょっとぐらい待っててくれてもいいじゃんか。」

岡崎がパンを買って二人の所に来た時にはもう既に食べ始めていたので、それまで2人を自分が待たせて申し訳ないなーと思っていた

ので、思わず口に出た。

「別にお前を待って食べても先に食べてもそんなに変わらんだろう。それより結構早かったな。まだ買えてないやつもたくさんいるみたいだけど？」

「ああ、それなら。何か今日は4限目に2、3年は集会があったらしくて、俺がここに来た時はまだ一年しかいなかったから人数が少なかったんだ。」

言われてみると、確かに今並んでいる(?)のは大半が2、3年生だった。一年生はもう大半が買い終えてご飯を食べ始めている。

そして、3人共々何とも無しにぼーっと見ていたら集団が急に乱れた。

上村と岡崎は何かどうなったんだろうとその場で考え始めて、二人がほぼ同時に朝日に意見を求めようと思って見てみるとすでにその場に朝日の姿はなく、辺りを見て見ると、案外直ぐに朝日の姿は見つかった。

いつの間にか、朝日は購買の前の人ごみの中心らしきところにいたので2人は顔を見合わせて驚いてしばらくの間、傍観者になって状況を把握することにした。

(ホントだ、購買の所は2, 3年しかない。……
……ん、少し様子が変わったな。……ヘッ、行ってみるか。)

周りの人たちが反応するよりも早く朝日は動き出した。

そして、列が乱れたのはある一人の生徒が、生徒を殴ったからである。

殴った生徒はガタイのいい3年生で、殴られた生徒も3年で身長は平均的だったが、如何せん体重が軽かったので少し吹き飛ばされて、背中から仰向けに床に倒れた。

ここでもうやく周りの人達は何が起こっているんだと騒ぎ始めた。

殴った生徒が追撃に入ろうとして、近づいたところで二人の間に一人の生徒が割って入って来ると、いったん足を止めた。それをちゃんと確認してから、倒れてる方に向かって言った。

「僕に任せますか？場を治めてあげますよ……
……はいorいいえ。」

反応が遅かったので促すと、その生徒は少し体を起こしてから首を縦に一度大きく振って肯定を表した。その答えに満足したのか、一度倒れている生徒に微笑みかけてから体の方向を180度回転させて殴りかかっていた生徒に向かい合った。

「だそうですー、鬼島先輩。」

鬼島 則之 朝日作成清高有名人リストに載っている人物で、本校で3, 4番を争うほどの強さで、少しカッとし易い性格をしていて、先生方の注意人物の一人。

「お前は関係ないだろ！！出しゃばるな！ブンッ、・・・」
すごい剣幕でどなし立てて、朝日目がけて右腕を振りおろした、
が朝日は左手で相手の攻撃をいなしてかわした。

はあっ、この人も世話が焼けるなあ。

「無関係ではありませんよ、・・・・・・部長に頼んだんだから。
それに、・・・・・・」

鬼島の近くによって小声で本人にだけ聞こえるように言った。

「・・・ここはギャラリーが多すぎます。それに先生もたくさん見ていらっしゃるようですし、退学にはなりたくないでしょ先輩。やるなどは言っても意味がないから言いませんが、今は止めといった方が良いですよ。」

そう言って離れて最後に周りの人みんなに聞こえるように一言、

「この事の顛末は俺に委ねられたんですよ。」と言った。

小声で言った言葉で鬼島は落ち着いてきたらしく、話を聞いてやるとゆう感じでこちらを睨んで来た。

ひとまず落ち着いたみたいだな。

「先輩がここに座ってる人に殴りかかったのってこの人に変な言い
がかり付けられたからですか？」

「ああ、そうだ。こいつがいきなり・・・・・・ってお前、
何で知ってんだよ。」

鬼島は途中で変に思って尋ねたが、朝日は黙ったままにいる。

そうか、やっぱりな。……これで9割方は解決した。今回はすっきりとまではいかなかったのが少し残念だな。……
・だが、俺の近くで二度はさせてやらんし、これは恐らくこれで終わるということは絶対ないだろ。今回も後ろに誰か……か。フツ、せいぜい簡単に終わるようなことはしないでくれよ、謎は深ければ深い程面白いからな。

「おい！何で知ってんのかって聞いてんだよ！！」
おっと、まだこの人達が居たんだったな。さっさと終わらすか、そんなに時間も掛けてられんし。

「僕が分かったのは、ずばり……床におそらくこの人のだと思っくんすけど、こんな財布が転がってたんですよ。」
朝日はポケットの中からブランド物の財布を取り出して床にいる先輩の前で見せた。

「確かに、これは僕のです。」
財布は先輩に直ぐに渡して聞いた。

「で、先輩あなたはいきなり後ろから財布を取られて振り返ったら、怖ーいこの人が立ってたから直ぐに疑ってかかったんでしょ？」

「そ、……そう、です。」
2，3度鬼島の方に目をやりながら答えを返した。

当然鬼島は切れそうになったが、朝日が鬼島の眼を見たことで寸前のところでこらえた。

よかった、ふう、こんなんでよく今までこの人学校にいられたなあ。

「鬼島先輩。財布盗ったんですか？」

「んなことするわきゃあねえだろ!!」

ついつい茶化しちまった。まあ、これはもう俺の性分みたいなものだから仕方ないところがあるからなあ。それに、直す気も無いしな。

「冗談ですよー。貴方がお金が欲しいんならこんなところでこんな取り方しないと思いますし、どうせやるなら後ろからじゃなくて前からですよーね？」

そうなんだよな、誰だってこんなところで取ろうとしたりするはずは無いんだけどな………普通は。

「俺はカツアゲなんてしないが、こんな所では絶対やらんだろうな。」

「でしょーっ、てことでもう鬼島先輩は帰っていいですよ。必要ならこっちから伺いますんで。」

この言葉には周りにいる人のほとんどが驚いた。

そして、鬼島が言葉を発しようとしたが、その声はちようどいいタイミングでなり始めた余令のチャイムの音で誰にも聞こえなかった。
………聞くことはできなかった。

「フフフツ、切りもいいのでこっら辺でお開きにしましょう。授業に遅れると少しまずいでしょう。鬼島さんも一発思いつきやっただから一先ずここは帰って下さい………先生方と先輩はちよっーとだけ付き合って下さい。」

生徒と供に教室に戻ろうとしていた数人の先生と当事者の先輩だけ呼び止めた。

「先生方は鬼島先輩がこの人を殴ったということに対しては罪に問わないで頂きたいんです。」

このことには全ての先生が納得できなくて、一人の人が皆の思いを代弁して言った。

「それは納得しかねますね。何があったとしても人を殴ったりしてはいけないのに、彼はそれをしてしまったんだから。」

ハハッ、面白い事を言うなあこの人達は。いっそのことこのままほっといてこの人達が先輩にぼこられる姿も見たいんだが、今ここに先輩居ないし、当事者が居ないとこでこういう話しされるのは嫌いなんだよな。

「先生方も少し冷静になってみて下さい。今、この先輩が一番恐れていそうなのは何ですか？・・・それは鬼島先輩のことでしょ。」

貴方達があの人を自宅謹慎にでもしたら、恐らくこの人は危なくなってしまうねえ、夜道には特に気を付けなくちゃならないかもしれない。

けど、これは事を穏便に済ませれば済むことなんです。・・・・・・

・・・先輩は仕返しとかしたいんですか？」

この問いかけに対する答えも首を縦に振るだけで口を動かさずに答えた。

「この人は出来るだけ穏便に済ますことを望んでいるんです。この申し出を貴方達が断るのはいささか、出すぎたことじゃないんですかねえ。」

ここまで来ると先生も答えに詰まった。

「ハハハッ、まさかとは思いますが別にな先生たちは生徒に体罰をするのが好きなんじゃないんでしょう？」

この言葉にもうまくいい返すことができない。

「だったら、この件はもう無罪放免ってことでいいですね？」
渋々頷くしか無かった。

「では、この話しも終わりにしてもう僕と先輩は先に行きますね。」
と言って二人で食堂を足はやに出て行った。

「先輩はこの結果には満足なんですよね。」
2人が廊下を歩きながら話をしているところである。

「う、うん。あのままだったらどうなったか分からなかったし。」
それを想像するだけで、体が震えだしてしまう。ホントに今隣にいる少年が間に割って入って来てなかったらどうなっていたことか。

「フフッ、なら。……………先輩は僕の部の事は知ってますか？」

「知ってるよ、有名だから。」
今この学校であの部の事を知らない人は宝くじで1万円当てることより遙かに難しい。

「そうですか、ありがとうございます。じゃあ、……………」
……僕の部がタダで動いているというわけではないということ

は知っていますか？」

「・・・・・・・・・・うん」

「見返りを要求したいところなんですけど、今のところ無いんですよ。だから、今回の事は貸しにします。・・・・・・・・・・じゃあ、僕はこっちですので。機会があればまたご利用ください。」
先輩は少しその場で考え込んでから、教室に戻って行った。

フツ、これで動かせる人が結構集まってきたな。

それに、今回の件はまだ何かありそうだし・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・楽しくなってきたかな？

あー・・・・・・・・・・っつ、そういえば、昼飯まだ全部食ってない。
弁当はたぶん気が利く上村が教室まで持って行ってくれてるだろうけど、・・・・・・・・・・まったく、ほんと人騒がせな人達だったな。

昼飯時の一騒動（後書き）

紹介No, 7

鬼島 隆一 きじま りゅういち

身長188cm 体重86kg

成績 中の下

容姿 中の上 この人は顔は整っているが、髪で顔が隠れてしまっていて、ちゃんとしたら上クラスには行くだろう

性格 短気、喧嘩っ早い

教師たちのブラックリストに記載されている

喧嘩が校内で3, 4番ぐらいに強いらしいが、後の上位2人は・・・
．．．．．
そして、この強さの人のパンチを平然とかわした朝日はいたい．．
．．．．．

今回の事件の本当の目的は何処に？

この回もこちら辺で終わりにします。
よろしければ、次からも読んで下さい。

追記；いきなりあとがきを増やしました、済みません。自己紹介を
どこで使うか考えた結果あとがきの欄にすることに決めました。

初の依頼と初授業

先輩と別れた後、少し考え事をしながら教室に戻って行き、教室の近くまで来て直ぐに次の授業が何かということが頭に浮かんできた。それは、この静かな廊下に自分以外には目の前の人物しかいなかったからだ。

何でもまだこの人廊下にいるんだよ。もう始まってから5分以上は経っている筈だぞ。

さて、どう話しかけようか？はたまた、話しかけようか、止めところか？

これはしばしば考えなければならぬことだよな。

余り合ったことのない人に話しかけるときは少し戸惑うものだ。最も俺はそんなタイプじゃあないけどな。

それなら何故何も言わないのか？

それは、・・・・・・・・・・・・・・・・この人が面白いからだ。

何故面白いのか？

それは、止まっているまた、動かない、ジッとしている物を見ていてもあまり面白くもない。ま、この人みたいに奇麗だったり可愛いものだったら良いかもしれないけど。

それは、さておき動いている物はどうでしょう。僕は規則的なものでも不規則的なものでも、なかなか興味をそそられます。止まっている物と違って動いている物は目につきますし。動いている物には次もありますから。

最も僕なら、止まっていたら動かしますが・・・・・・・・・・

で、この長い前振りで結局何が言いたいのかと言うと目の前にいる鳴海先生が僕がこれだけ長々と考え事をしている間も忙しく動いているという事に他ならない。

何時までもこうしていても俺は良いんだが、この人はそうはいかないだろうから残念だね。

「鳴海先生、少し落ち着いて下さい。」

いきなり声を掛けられて驚いたのか、少し飛び上ってしまった。だが、現実世界には戻ってきたらしく、さっきより動きが少なくなってきた。

「落ち着いてきたみたいです。僕が先に入ってそのあとに鳴海先生を呼びますんで心の準備をして置いて下さい。・・・・・・は、・・・・・・そんなに緊張しなくてもいいと思いますよ。ここなことは起こさせないから。」

はあっ、悪い癖が出たな。感情が高ぶるとつい敬語を忘れちゃう、気をつけなきゃな。

先生が後ろで何か言ってた気がするが、それを無視して中に入って行った。

教室の中は俺が入ってくるまではどの教室よりも騒がしかったが、俺がドアを開けた瞬間に急に静まり一斉に俺の方を見て来た。

朝日は何かリアクションを取ろうと思ったが、何も思いつかなかった。優しく笑いかけた。

その時周りの人が小さく歓声を上げたのだが、朝日はお構いなしに教卓の後ろまで行くと、皆に呼びかけた。

「皆さんは何故先生がこの教室にまだ来てないか、ご存じかな？」
クラス内で比較的ノリの良い人達が首を振った。

「じゃあ、気になりますか？」

今度はさっきよりも多くの人が、頷いて、同意の意を示す。

「ではお答えしましょう。先生は言っていましたでしょう、まだ新人だ、と。経験が不足しているんです。こんなことはまだ人生で経験した事がなく、緊張しているでしょう。（あるいは、もう後がなぐ切羽詰っているか）だから、教室前でずっと不安にさらされていたんです。（でなかったら、電波をどこかに送っていたか）今、僕が合図をすると先生が入って来てくれるんですが、皆はあまり喧しくせずに、温かく見守ってあげて下さい。できない人は手を挙げて下さい。」

この授業が終わるまで夢の世界に連れて行ってあげます。」

笑顔で言い切ると、途中手を上げようとしたこのクラスのお調子者の男子数名が、あいつならやりかねん、と思い手を下げた。

クラスの人全員が納得してくれたとわかると朝日は、先生入ってきてください、と言って先生を呼んだ。

先生は明らかに緊張していた。その要因の一つに動き方がある。わざとやってるんじゃないかって思う程ぎくしゃくとした動きで教卓の所まで移動してきた。

これをこのタイミングでわざとやってるんなら本当に大したもんだけどな。

そして、他にもあるのだが、もう1つに顔を上げられない。

確かに大勢の人の前に行くと緊張して上げられなくなるのは俺にはそんなことはないが他の人の話を聞く限りそうなんだろうが、それなら何故教師になったんだよ。

それに何か喋らないとそんな下向いててもな。仕方ないな、

「先生、今日までの授業は32ページだったので、次は33ページをやるのだと思いますが？」

先生はそれを聞いてなんとか授業をしようという気にはなったらしくまだかなり緊張している様だが、し始めた。

クラス皆が1つの感想のもと団結することとなった・・・・・・・・
・・・・・・・・疲れた。

先生は教科書1行読むごとに1回は囁んでいるんじゃないかというペースで囁んでしまい。そのたびにみんなに謝り、だんだんと先生の緊張度も上がっていき生徒たちにもそれに合わせて緊張してしまい、最中的には教室内に何だか分からない、重量発生器でもあるんじゃないかという位の空気が成形されていた、・・・・・・・・
・ある一人の少年以外に。

その少年はクラスの皆が固唾をのんで見守っている中、鼻歌でも歌い出すんじゃないかという位に機嫌がよさそうに見えた。最も朝日の席は一番後ろの端なので、このことに気づいた人物も極僅かだったのだが。

そんな事もあったが、なんとか先生のメーターが限界値を超える前にチャイムの音が鳴り事なきを得た。

クラスメイトの大半が放心状態で机に突っ伏している中1人が言った。

「シシシッ、あの面白いなー。……………俺の所に……………」

もちろんこの言葉が聞こえたのも周りの数人だけだった。

この日も放課後になった後、皆で部室に集まって朝日と上村は読書、岡崎はソファアーの上で眠っていた時だった。

「岡崎起きろ、客だ。」

と言って、朝日が姿勢を正した時だった。

部室のドアが開いて誰かが周りをキョロキョロと見ながら入ってきた。

「ようこそ、何用ですか？取り敢えず腰かけて下さい。早く起きろ。」

手に持っていた本を岡崎に向かって投げながら言った。
見事に顔面に命中し、岡崎は顔面を抑えながら呻きだし、朝日が、
廉頼む、と一声掛けると後ろに岡崎を引きずって行った。

「さあ、どうぞ。あの子なら心配いりません。いつものことです。」
そんなに知り合って日にち経ってないけどな。

入って来たのは女の子で渋々ながらソファ―に座った。

「それで、何用ですか？」
話すまで少しの間はあったが少しずつ話し始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あの。じ。実はね、今・
・クラスで、いじめ、が起きてて、・・・・・・・・それで、皆・
・何でって、思って、るんだけど、分からなくて。」

「フフッ、要件はその人を探し出して裁け、とそういうことですか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい。」

「一つ、いいですか？」
何も言わなかったがそれを肯定だと受け取る。

「あんたも被害にあってるだろ。」
今までと違って少し強い口調で

「・・・・・・・・ツ!!・・・・・・・・・・そ、それ・・・・・・・・・・は・

・・・」

そうか、やっぱりな。全く、面白味に掛けるね。もっと首尾良くやれよな。これはちょっと違うか、根本的に駄目なんだから本末転倒か。

「もう構いませんよ、大丈夫です。任せておいて下さい。・・・・・・その代り、全てがうまくいったら対価が必要なので悪しからず。」

とても柔らかに微笑みながら言ってあげた。

女性は一言、済みません、とだけ言って頭を下げると足早に出て行った。

「何だったの、今の。」

「旅行前の軽い余興だよ。」

この時の目はかなり印象的だった。
力強く、それでいて、何とも儚げな目だった。

初の依頼と初授業（後書き）

I n t r o d u c t i o n N o , 八

鳴海^{なるみ} 真奈^{まな}

職業 臨時教師

担当 現代国語 古文

身長 150cm 容姿 上の中 かわいい系

性格 内気、ドジっ子、人見知り、
・・・・・・・・etc

前の職場で何かが・・・・・・・・・・?

朝日は何を考えている・・・・・・・・?

電話の内容とは・・・・・・・・?

作「それではよろしくお願いします」

鳴「あ・・・・・・・・あの・・」
「こちらこそよろしくお願いします」

作「・・・・?これまた早速なんですが、何故教師に？」

鳴「そ．．．それは、「子供が好きなんですよ。」」

作「．．．??じゃ、じゃあ教師になって何か困ったこととかは?」

鳴「え．．．えっと、「あまり差し当たって言うことは無いですね」」

作「おい、お前なあ。」

?「今回はこれで終わりです。」

作「おい!!」

次回はあっさりと依頼を解決してしまう解決編です。

彼女の心境や如何に

いじめ、とは一口に言うが、それには程度も方法もいろいろある。

被害者の物に外的損傷を加えたり、どこかへ持ち去ったり、間接に精神的に追い込む物と、対象人物に直接危害を加えたりし、肉体に対してダメージを与える物とに大体は二分されるであろう。

そして、どうやら今回のいじめという奴は肉体的に負荷をかけるものらしく、どうやら発端となったのは実に三月程も前の事でクラスのやんちゃっ子な三人組の暇つぶしだったらしい。

この学園の先生は情けない事に一月後には気づいてはいたが、暗黙の了解の様なものが、三人組の親と結んでいたようなので手が出せないでいたそうなのだ。

他のクラスの生徒も流石に社長も息子ということもあり、手出しも出来ずにいたのである。

最初は数度殴ってお終い程度だったのだが、じよじよにエスカレーターしていき、今学期になってからは救急車に乗れる位まできているのである。

とまあ、上記の事は少し中が良くなったとある部の部長が教えてくれたことと少し自分で調べた結果である。

此処まで状況記載があつて犯人が解っていないなんてそんなことはまったくなく、ほんの数十分で判明したのだが、一日経って今は何と学校からそう遠くない所にある良く見つけたな、と思わず褒めてしまった程のひとけのない工場跡にぶるぶる震えだした岡崎を引きずって三人できていた。

「あゝっ、先輩A、B、C、D、……E、F、Gまでいんのか？ A、G君お願いされたんで月が変わってお仕置きしにきたわけだけだよ。大人しくお縄についてまぢゃあくれんかね。こちらお前らまたく暇を親にしがみついてまでいじめして埋めるようなことしてる事の欠片程しか暇がねえんだわ。

今投降するんなら……そうだな、7人もいるし某戦隊物のコスチュームっぽい俺のオリジナルバージョンの物を着て一日挨拶運動で手を打ってやらんこともないぞ。みんなも恐らく十分反省したことはわかって許してくれるだろうし、これほどまでのことは今は考え付かない程の譲歩だぞ。どうだ、受けるか？」

扉を開けるとどこからかメガホンを取り出し、満面の笑みを浮かべて工場跡の奥の方にいる7人の男達とその目の前に転がっている傷ついた依頼者の方に向かって声を発した。

朝日の発言に上村はくすくすと笑いだし、岡崎はさっきとは違う感じに震えだしたのだが、どうやら男達は大変ご立腹な様子である。

「てめえ、ふざけてんのか!!??
つか、お前転校生のくせに何様のつもりなんだ? ちょーしこきすぎ
なんだよ!!」

男達の中の真ん中に位置していた者が地が少し震える程の声で怒鳴った。

「ふふふっ、俺はふざけているつもりは四割程度しかありませんよ。
それに…何様、…ふむ。あまり考えたことなかったな。面白い話題だな。まあ、差し詰め……。」

言葉を切り、突然ニヤニヤ笑いを止めて真剣な顔をして多大なる自信を持って言い切った。

「神様、と言った所かな。何の神か? という所は後々考えるとしてな。」

その時、その瞬間のその場にいた全員の人思わず息を飲んだ。

「……ッ!! てっめえは、一度痛い目見ねえと分からねえみてえだな。」

「くふふっ、はなからそのつもりでいた人達がよく言いますね。そ

れに、痛い目なら一度でつかいのを見てるから俺には必要ありません。むしろ、先輩達が見るべきだな。今ならタダで見れるがどうします、見ますか？」

「ははっ……ぶち殺せ!!」

男の掛け声と共に6人の少年が飛びだした。

「あゝあ、熱くなっちゃって。多対小でしか戦う事も出来ない人が、そんなに痛い目に早くあいたいんですか？
分かりました、鬼島先輩!! お待たせしました。出番ですよ。」

朝日がドアの方に声を掛けると、ドアを蹴破って鬼島が入って来た。

「ふん、そいつがいるからいい気になってやがったのか。だが、こっちは6人だぞ。舐めるなよ。」

6人は怯む事なく前へと進む。

「6人なら勝てるそうですけど？先輩。」

そして、鬼島の所に四人が到達する。

「はん、6人だと。どうせなら、30人位連れてきやがれ。」

数秒で全員呻き声を上げながら地に伏せていた。

「にししっ、30人ですか。勇ましいですね。見てみたいな。」

「おめえが言うのと冗談に聞こえねえんだよ。それより、もうお前に借りは返したからな、俺は帰るぞ。」

鬼島は帰り際に後ろから迫って来た男を一人を吹っ飛ばして帰って行った。

「冗談？はさておき、これで後は先輩一人ですよ。もう、謝っても効果ないっすから。」

リーダーの男はついさっきまでの自信に満ちた顔とは違って情けなく青ざめた顔になっている。

「は、ははっ、あー！そうだ。こっちにはなあ、女が……。」

男が見た先のどこにもさっきまでいた女の子はいなかった。

「女の人を人質に取ろうと男としてどうかとは思いますが、残念でしたね。俺と先輩で楽しく話し合っていた時に俺と一緒に此処に来た人が2人いたでしょ。あの二人が連れてっちゃいましたよ。」

これでチェックメイト、あんたを守る駒はもうないよ。クフフッ、何して遊びましょうか？」

「お、俺には、親が社長やってるんだぞ。お前なんて……。」

もうその少年の姿は情けない事この上なく、それが朝日の勘に触れた。

「この後に及んで親だと、それに言っただろ。チェックメイトって、摘んでるんだよ。言ってる意味は家帰ってママに聞いてみる。お前みたいに情けない顔で教えてくれるから。言うまでもなくお前は有罪だ。退学何かではもう済まさないよ。お前の処遇は俺の掌の上に乗ってるんだからな。」

私が彼らの標的にされたのは3学期のことだった。

良い分は成績が良かったからだと言っていた。

その日から友達だった人達も私を避けるようになった。

痣を作って帰った時には親にかなり心配された。

だけど、すぐ春休みに入ってそれから始業しても何の音沙汰も無かったからもう終わったんだと思っていた。

ある日廊下ですれ違う時にふと目線があい、そこからまたいじめが再開された。

そんな時だった彼が転校してきたのは、残念なことにその目立ちすぎた転校生は彼らの次の標的に選ばれてしまったのだ。

彼らは私に言った。彼を誘き出したらもう金輪際関わらないと、私は悪いとは思ったけどそんなのは今の状況と比べたら遙かに小さな物で直ぐに彼を利用して終わらして、また普通の日常に戻ろうとした。

そして、彼の前で彼らに言われた通り依頼をした時に彼に言われた言葉に深く動揺してしまった。

これで、失敗になってしまふかと思ったら、思わず涙が出そうになった。

けど、彼は微笑んだ。

私の心の内を知ってる見たいに、酷く安心してしまって罪悪感で胸がずきずきと痛んで、それでいて胸の内が熱くなって、ドキドキして、頭を下げて飛び出して行っちゃった。

その晩は彼の微笑んだ顔が浮かんでは消えて、今日は授業にもなんだか集中できなくて、昼に彼が教室に来た時には思わず眼で追っていた。

でも、心がうわついていたのはそこまで彼らが廊下で彼を見ているのを見た時には又胸が痛み出して、胃がどうにかなるんじゃないかとさえ思った。

そして、放課後になり彼らに連れられて人気の無い工場跡にきて10分程で彼が来て途中で岡崎君と上村君が私を7人の後ろの方にあるドアから連れられ外に出たのだが、驚いた。

彼は7人もの人に対して物怖じする事なく心底楽しそうに会話していた。

上村君が10分もすれば終わると言った通りに10分程で彼は出てきた。

四人は一旦学校の部室に戻ってきたが、上村と岡崎は帰宅して2人になった。

「先輩俺が依頼を受ける前に約束した事、覚えてますか？」

「えっとー、・・・対価のこと。」

恐る恐るといった感じで聞き返した。

「そう、話が早くて助かります。今回は結構俺頑張ったんですよ。だからね、強制はしませんけどこの部員になってもらいたい。正

直、人数少なくて困ってるんですよ。いいですか？」

もっと凄い事を言われるんじゃないかと身構えてしまっていたので、少し拍子が抜けてしまつて笑みがこぼれた。

「ふふふっ、いいですよ。」

こうして、三か月も続いたいじめ問題はあっさりと朝日の手で解決され、なぜ彼女は部員になるだけで済んだのかというところのことにより生徒からの評判も、生徒会からの印象もよくなったからだという事は朝日以外誰も知らないことである。

彼女の心境や如何に（後書き）

第9回目

黒霧くろぎり 彩あや

役職 裁判部新入部員

身長 156 cm

成績 上の下 容姿 上の下

性格 少しお人好しな所がある

この子は今まで普通の模範のように暮してきたが、学年に普通で無い生徒が現れた事によりそれも崩壊してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2447d/>

清涼高校裁判部

2010年10月9日22時33分発行